

福崎町文化

第41号 令和7年3月6日 兵庫県神崎郡福崎町福田176番地の1 福崎町文化センター発行



武者絵 松岡映丘画
福崎町立柳田國男・松岡家記念館蔵

春日山の頂上に『観音岩』がある理由

鍛冶屋区在住 白井和弘



1. はじめに

『観音』が付く日本語の言葉として観音竹、観音開き、浅草観音、観音杖などが思い浮かぶが、春日山の頂上に昔から観音岩と呼ばれている岩がある。しかし、知名度でいえば、同じ頂上にある春日山城跡と比べると圧倒的に観音岩の方が低い。この度、なぜ春日山の頂上に観音岩があるのかというそもそもの疑問を精神と科学という二つの視点から考察し、昔から春日山の山頂にある観音岩についての認識を新たにしたいと思う。

1メートルほどの巨大な縦穴に接するようには、高さ約六十センチ、幅約八十センチほどのごつごつした灰緑色の岩がぼつんとある。岩の表面には馬の蹄のような形の小さな窪みが二つ三つあるのが見てとれる。伝承によれば、その昔、観音菩薩が衆生を救済するために馬に乗った御姿でこの地にご来迎された際に付いた蹄の跡であるといわれている。



観音岩

『観音岩』の伝承とは・・・

福崎町八千種にそびえる春日山の頂上に、後藤氏代々の居城であった中世山城跡がある。城の食糧保管のために使っていたのではないかと伝わる直径三メートル、深さ一・五メ

2. 観音信仰について

春日山の西側の山裾には、50年以上前にため池を埋め立てて作られたコンクリート製のプールがある。以

前その場所には村人から『観音さんの池』と呼ばれていた円形の小さな池があった。古老の話では、池のたもとに小さな祠があつて観音菩薩が祀つてあつたらしい。

観音像には、よく知られている十一面観音や千手観音、聖観音菩薩や馬頭観音菩薩など全部で三十三身があるとされている。その数ある観音像の中で本来のお姿とされているのが聖観音菩薩である。聖観音菩薩は手に水瓶を携えていて、水瓶の空いた口は足元に向けられている。大乘仏教の教えによると、水瓶の中には決して枯れることがない補陀落（観音菩薩の居所とされる）にある功度池の水（＝功度水）が入っているのだそうだ。

谷間を堰き止めて大谷下池が鍛冶屋区内に造られるまでは、山の斜面に点在した小さい池の一つ一つが灌漑用のため池として重要な役割を担っていた。米作りには、年間を通して安定した水の確保が欠かせないことは今も昔も変わりはない。しかし、今日までの村の長い歴史において、おそらく千ばつのための飢饉を何度となく経験したことだろう。だからこそ村人は、功度池にあやかっ

に違いない。『観音さんの池』という池の呼び名から、その年の気候により収穫が大きく左右され、さらに時の領主からの厳しい搾取に合わないがらも、限られた土地で細々と米作りに励まざるを得なかった村人の悲哀がひしひしと感じられる。

福崎町からさほど遠くない所に西国三十三所観音霊場の第二十六番札所の法華山一乗寺と第二十七番札所の書写山圓教寺がある。ここ播州地方は、古くから観音信仰が根付いている地域であり、今でも各所に西国三十三所観音霊場を結ぶ巡礼道の面影が残っている。そして、お盆や四十九日の間はもとより檀家で読誦されている御詠歌や観音経には、観音菩薩が三十三の姿で現れ、苦しみから衆生をお救いくださるという観音信仰が根底にある。

また、鍛冶屋区の氏神である熊野神社は、観音信仰の水上といえる那智の熊野三社と強いつながりがある。さらに、頂上の春日山城跡に通じる登山道の入り口にひっそりと佇んでいる西邦寺のご本尊は、まさに『観音菩薩』（但し、昭和年代に盗難被害に遭い現在は釈迦牟尼仏）である。『観音岩』と『観音さんの池』。そして、「補陀落や岸きし打つ波は三熊野の那智のお山に響く滝津瀬」の

和歌を第1番とする『御詠歌』。これら何重にもなる観音信仰の証拠の数々は、鍛冶屋区と観音菩薩との縁の深さを物語っているのである。

日本の歴史においては、承久の乱（1221年）を契機とし、鎌倉幕府による全国支配が確立していった。その過程で台頭することになる播州赤松氏の栄枯盛衰に翻弄される春日山城は、南北朝年間の築城と伝えられている。春日山城は、堅牢な石垣や天守閣を戴く恒久的な城でなく、当時市川流域を分割して治めていた陣城としての役割が強い中世山城の一つだった。山頂には曲輪らしき形跡が残っているが、おそらく城の縄張をした際に頂上に初めて姿を現したと考えられる『観音岩』は、一度も撤去されることなく現在に至っている。そして、西国三十三所観音霊場巡礼を中心とした観音信仰は、南北朝時代以降に庶民の間に広がりを見せる。これらを考え併せると、頂上の小ぶりの岩を『観音岩』とする最初の見立ては、春日山城の築城以降とするのが妥当だろう。初代城主となった後藤基明を初め、後藤氏の家来たちは、土の中からひょっこり現われ、何かと邪魔になりそうな岩の表面にあった窪みに一つの価値を見いだし、観音菩薩の加護の下で春

日山城と後藤氏子々孫々の繁栄を祈願したのではなからうか。

3. 観音岩の岩質について

私たちが住んでいる地球の表面は、厚さ100kmほどの14個ないし15個の巨大なプレート（岩盤）で覆われている。かつてウエゲナーは、大陸は1年間に数mm、数cmであるが移動をしているという『大陸移動説』を発表し人々を驚かせた。最新のプレートテクトニクス理論によると、日本列島は、約2億年前までアジア大陸の一部であったが、プレートとともに移動をし続けたことで徐々に大陸から引き離されていったと考えられている。日本海によりユーラシア大陸と隔たっている今の日本列島の形に近づいたのは、約1500万年以上前である。その想像もつかない歳月の間にプレート内で、褶曲や隆起・沈降などの地殻変動が繰り返され、尚且つ活発な火山活動や地震が起きた。因みに日本列島は、ユーラシアプレート、北米プレート、フィリピン海プレート、太平洋プレート

の巨大プレートの境目に位置し、4つの巨大プレートが接している場所に陸地があるような島国は世界的にも極めて稀である。

る中国山地は、本州西日本地方一帯を背骨のように西から東に長く連なっている。これは、大雑把にいえば、ユーラシアプレートによる南向きのエネルギーとフィリピン海プレートによる北向きのエネルギーが内部でせめぎ合った結果である。また、中国山地の山々は、日本の屋根といわれる中部地方や四国山地の山々

比べるとなだらかである。その理由として、各プレートにかかったエネルギーの大きさの違いにより隆起した山脈に高さが差が生じたからである。私たちが目にしている山々の景観は、山を構成している岩石の質に大きく関係している。これまでの地質調査により兵庫県を形成する岩石の主体は、中生代から古第三紀までの火山岩群と中・古生界の泥岩の一種である頁岩（けつがん）を主体とする地層群から成っていることが分かっている。プレート内部での褶曲と隆起により形成された中国山地の山並みは、固い変成岩質であるために長期間の風化・浸食にもよく耐え、山あいに入れば稜線を見失うほど峻険である。他方、瀬戸内海側は、六甲連山系の例外はあるものの、海拔の低いなだらかな山々と広大な平野が特徴的である。山の岩質として軟らかい頁岩層が多く含まれ、風化と

浸食で山はさらに低くなった。一方、海水面の地球的な上昇と下降に伴い、かつて海面下にあった沖積平野が現出したと考えられている。

海拔百九十八メートルの春日山は、八千種富士と形容される通り狭い頂上を中心になだらかな裾野が広がっている。質学的には丹波地層帯に属しており、頁岩の層に溶結火山礫凝灰の層が複雑に貫入しているそうである。地質調査では春日山の頂上の『観音岩』は、溶結火山礫凝灰岩である。ウィキペディアによると、溶結火山礫凝灰岩は火山の噴火で降り注いだ大小さまざまな火山礫が地中で固まった岩石となっている。『観音岩』の表面を観察すると、粒の大きさが1cm前後の火山礫が多く含



春日山

まれているように見える。また、高温下で溶けたために表面はガラスの質感を確かめることができる。

驚くべきことに『観音岩』は、太古の火山活動の影響で生まれた溶結火山礫凝灰岩脈が頁岩脈に混ざりこんで隆起した後、その先端の一部が地上に頭を覗かせていると考えられる。

4. まとめとして

私事だが、小学校6年生の夏休みの自由研究として、春日山城の歴史について調べたことがある。今から五十五年以上も前のことである。その時に作った薄い冊子は今でも大切に残している。春日山城の歴史については、庄区在住の郷土史研究家である水田五一さんに教えていただいた。水田さんは、小学生の私にも分かるように丁寧にお話をしてくださったことを今でも覚えている。私が最も苦労したのが、歴代春日山城主の家系図を写すことだった。父にもらった製図用の方眼用紙を何枚もつなぎ、細かな文字で全て書き終えるのに何日もかかった。しかし、改めて目を通してみると、ただたどしい文字であるがかなり重要なことを書いていたことに内心驚いている。小学生らしく不明な語句や人名を未

解決のままにしている箇所はあるが、この年齢になってやっと知識が追いついて来た感じがしている。また、小学生の頃から何度も父から聞いていた頂上の観音岩や大きな縦穴のことは、冊子の最後でイラストを添えて紹介している。馬の蹄の跡が硬い岩についたことや、観音菩薩が春日山を訪れたことを子ども心に不思議に思いつつも、親から教えてもらった観音岩の伝承を疑うことなく素直に信じ込んでいたものだ。

20世紀の哲学者であるフッサールは、著書の中で『閉鎖的な共同体においては、宗教や神話の類いは疑われにくい傾向にある』と指摘している。確かに鍛冶屋区も代々中播磨の小さな農村で、保守的で閉鎖的な農村特有の一面がないとはいえない。観音岩などの伝承を初め、村のしきたりや風習は、集団の秩序を維持するために重要視され、村で生きていくための精神的なよりどころになっていたといえる。

また、『観音岩』のような天然の岩石に神仏が宿するという信仰は日本には古代からあり、全国的にも様々な伝承が残っている。メジャーなところでは三重県二見ヶ浦の『夫婦岩』や兵庫県高砂市の『石の宝殿』があり、近い所では福岡町の七種に

『弁慶ののこぎり岩』や加西市に『ゆるぎ岩』がある。アイルランド系の作家で明治時代に来日し帰化したラファディオ・ハーンは、岩の形状に何か暗示的な意味を持たせる日本の風習に強い興味を持った。西洋人の目からすれば、奇岩信仰はいかにも神秘的で東洋的な風習に映ったのだろう。

さて、



柳田國男



フッサール



ラファディオ・ハーン

『観音岩』の頂上にあること
の真相は、春日山を形成する頁岩の層に混入した溶結火山礫凝灰岩と観音信仰が結びついたものといえる。その二つは相対する物理的世界（＝科学）と信仰（＝精神）である。そして、始まりで比較すれば、岩石の数千万年前と考えられるのに対し、観音信仰が庶民の間に広がりを見せ始

めるのはせいぜい千年足らず前のことである。この桁違いの年月の差をいったいどのように捉えればよいのか。ラファディオ・ハーンが奇異に感じた理由はこの辺りにあるのかも知れない。

しかし、現象学を提唱者したフッサールは、物理的世界（＝科学）こそが唯一絶対の客観的真理であるかのようにとらえようとする近現代の風潮に警鐘を鳴らした。現象学の中でフッサールは、私たちが直接的に色を見たり、音を聞いたり、手で触れたりして感覚的に体験している実生活のことを「生活世界」と名付けた。そして、人は誰でも物事の真・善・美を判断する基準をそれぞれに持っているという。重要なのは、その時々人々が生きて体験したという事実であって、人々の自由な意志のもとで存在した生活世界を科学的根拠に乏しいからという理由で全否定することの愚をフッサールは指摘している。放っておいたなら、いつかは人々の記憶から忘れ去られ消えていく運命にある昔からの生活世界や文化に敬意を払い、興味や関心を寄せていくことが極めて大切である。まさに我々が柳田民俗学の精神もそこにあるといえるだろう。

最後になるが、春日山登山コース

や頂上付近が整備され、嬉しいことに令和5年秋には春日山城CGがアプリで閲覧可能となり、春日山城跡が注目されるようになった。願わくは、一人でも多くの方々に実際に春日山城跡に足を運んで頂き、灰緑色の可愛らしい観音岩の質感と名前の謂れとなった三角形の小さな窪みをご自分の掌と眼でしっかりと確かめていただきたい。そして、生活世界での「もの・ひと・こと」との悲喜交々なかかりから生まれた身近な文化財について、その由来や歴史をあれこれ自由に想像する楽しみを子どもたちに伝えていきたいと思う今日この頃である。

参考文献

- 「観音の来た道」鎌田茂雄 著
講談社現代新書
「哲学のモノサシ」西研 著
河出文庫
日本列島プレート模式図
<http://ascii.jp/elem/000/000/455/455932/index-3.html>

柳田國男の『秋風帖』の旅

柳田國男・松岡家記念館 北山容子

はじめに

柳田國男は八十八年の生涯の中で、国外も含めて百回以上の旅をしました。その訪問先の多くは観光地ではない場所であり、國男はその土地の人々に「同情」して話を聞いたり、その土地を見てまわることを心がけていました。この「同情」は、調査を行う土地の人々の気持ちを思いやり、人々と同じ気持ちになる“という意味で、そうして行われた調査を基に、数多くの新聞・雑誌への寄稿文や著書が生み出されました。

國男が旅への決意を固めたのは十歳のときでした。山遊びの一行に連れられて故郷辻川の東にある日光寺山に登ったときに、瀬戸内海を見て「出世をせねばならぬ。そうして方々の海を見てあるこう」（『海女部史のエチュウド』『文芸春秋』四巻五号）と決意し、学生時代から晩年まで様々な場所を訪れています。その中でも大正九年（一九二〇）六月、大正十年（一九二一）二月の間は、北は青森県から南は沖縄県の石垣島まで、国内を縦横無尽に旅をしてまわりま

した。

『秋風帖』とは

柳田國男・松岡家記念館では、この時期の旅に注目して「柳田國男の旅」秋風帖・雪国の春・海南小記」と題して秋季企画展を開催しました。「大正九年は私一箇の為に、最も記念すべき旅行の年であった。」（『秋風帖』序）と記すとおり、六月の佐渡島を皮切りに、八月には東北地方、十月には東海・近畿・中国地方、十二月に九州・沖縄地方の旅に出かけています。そして、大正十四年（一九二五）には九州・沖縄地方の旅をまとめた『海南小記』、昭和三年（一九二八）には東北地方の旅をまとめた『雪国の春』、昭和七年（一九三二）には佐渡島と東海・近畿・中国地方の旅をまとめた『秋風帖』を出版しており、この三冊は、國男の代表的な紀行文です。國男は、このうち『秋風帖』のことを、他の二冊の時よりも旅の日程が短く、記した文章の量も少ないからでしょうか「大正九年の三つの旅行のうち、一ばん省みられなかった第二の紀行」（『方



『秋風帖』梓書房 昭和七年

言と昔他』解題』『定本柳田國男集第二十三巻』）としています。
『秋風帖』には、次の文章が収録されています。

- ・ 秋風帖（『東京朝日新聞』大正九年／『文芸春秋』大正十五年
- ・ 秋の山のスケッチ（『民族』第一卷第一号、大正十四年）
- ・ 向小多良（原題「小さな手帖から」『同人』第三五、大正八年）
- ・ 木曾より五箇山へ（原題「旅日記」『文章世界』第四卷第一一、明治四十二年）
- ・ 佐渡一巡記（『旅と伝説』第五年十月号、昭和七年）
- ・ 佐渡の海府（『歴史と地理』第六卷第二号・第三号、大正九年）
- ・ 熊野路の現状（『郷土研究』第一卷第一二号、大正三年）